ポスターNo.A2　　**実践発表**

物語を通して、私の中の物語に出会う
―「竹取物語」と「浦島太郎物語」―

丸山多賀子（兵庫県立芦屋国際中等教育学校）

１．実践の場の紹介

1.1.　Ｎクラスの存在

本校は、兵庫県にある公立の中高一貫校である。海外につながりのある生徒が全校生徒の約８割を占める。入試を経て入学してきた生徒に対して日本語のプレイスメントテストとDLAを実施し、日本語の支援が必要だと判断した場合、国・数・理・社の授業で取り出し、少人数クラスで最長２年間学習する。この少人数クラスをＮクラスと呼んでいる。Ｎクラスでは、やさしい日本語で教科の学習が行われると同時に、授業中の母語通訳だけでなく、考査の母語翻訳もある。ただ最近は、母語ではなく、やさしい日本語での支援のほうが適している生徒も増えている。

1.2.　本実践対象のクラス

本実践は、中学１年生のＮクラスを対象に実施したものである。授業は、エジプト、インドネシア、中国、ブラジル、アメリカの５人のクラスと、ネパールの３人の生徒の２クラスで実施した。生徒の滞日年数は１年～３年である。日本語のレベルは、文部科学省の「ことばの力のものさし」[1)]の＜聞く・話す＞ステップが５，＜読む・書く＞ステップが３～５である。教師との対話では、内容や主題をよく理解できていることなどから、「ことばの力のものさし」の＜包括的なことばの発達ステージ＞は、D【因果】期～E【抽象】期を移行中と考えられる。しかし、母語での読書経験の減少に加え、日本語での読書経験も不足気味のため、ステージが年齢相当に上がりきっていないとも考えられる。そのためか、他教科の授業や考査においてもたくさん書くことを避ける傾向にあり、単語でなんとなく理解していることが多くなっていた。

２．実践の紹介

2.1　教材

本クラスは国語の取り出しとして設定されているので、週に４回授業がある。１学期から徐々に教材を長文にし、２学期は在籍クラスと同じく『竹取物語』を計画していたが、単体で読まず「移り行く浦島太郎物語」（東京書籍『中学１　国語』）を重ね読みすることにした。古典学習への動機づけが主な理由であるが、「物語文法」を切り口にすることで、俯瞰的に物語を捉えることができると考えたためである。ステージＥ【抽象】期を目標にするため、二つの物語を通して具体的な作品を抽象化する経験をさせたいと考えた。そのためのステップ（日本語）への支援としてレベルにあったリライトを準備し、前作業として自分の身近なお話を紹介するという活動を取り入れることにした。

2.2　目標

「移り行く浦島太郎物語」の教科としての目標は、古典を学ぶ意味を考えることにある。さらに「竹取物語」では、古文の仮名遣いやリズムに注意して音読することはもちろん、登場人物の相互関係や心情の変化について、描写をもとに捉えるとある。これらの目標を達成するために⑴～⑶を主たる日本語の目標とし、全１８時間の授業に臨んだ。

⑴つながりのある国の昔話を調べ、紹介することができる。

⑵各国の昔話を通して物語文法を理解し、「浦島太郎物語」の時代による変化を捉えることができる。

⑶「浦島太郎物語」と「竹取物語」がどちらも「行きて帰りし物語」であることに気づくことができる。

2.3　実践の様子

主に前作業である⑴の活動について紹介する。「浦島太郎物語」は、教科書の本文ではなく絵本からスタートした。絵を見ながら話を聞き、どのような物語だったかをそれぞれが再話した。すると、海に行く話がインドネシアにもあると生徒が言った。そこで、「小さい時よく聞いたお話や、みんなが知っているお話」を紹介し、発表することにしたのだが、まず家族に聞いてくることを宿題にした。すると、家族だけでなく、国の祖父母や友人に聞いた生徒もいた。「聞いてきた」ことを文章化する最初のステップとして母語を使って書いた。インドネシアの生徒の書いた物語紹介文は、インドネシア語講師をうならせる出来栄えだった。「こんな単語を使って書けるなんて驚きです。ここまで書けるとは思っていませんでした」とのことだった。そして発表のために日本語で書き直し、ポスターを作った。例として教師が「竹取物語」のポスターを使って発表したが、その際、分類の観点として物語文法（型）を導入した。例えば「三人兄弟の末っ子が成功する物語」や「貧しい人がお金持ちになる話」などである。生徒は、各国の話を聞きながら、「これはお金持ちになる話？」や「いい子が幸せになる話？」や「悪い人は絶対に出てくるね」など、内容だけでなく物語文法の観点から捉えていた。

この発表会を通して生徒は「物語にはいくつかの型がある。国によっていろんな物語があるが、共通する型が多い」ということにも気づくことができた。さらに、その後の「移り行く浦島太郎物語」の本文読解を通して、時代によって物語の内容や型が変化することも知り、「わたしの話もそうなのかもしれない」や、「子どもにルールを教えるために物語にするのが一番いい」などの意見が出た。

2.4　重ね読みの効果

黒板にはいつも物語の型が書かれているシートを貼っておいたが、「竹取物語」導入のために、「かぐや姫」の絵本を読んだとき、冒頭部分で「この話は、主人公が特別な生まれ方をしている型だ」と生徒からパッと出てきた。また最後まで読んだ後は「浦島太郎と同じだ。どうしてかというと、特別な世界に行って帰っているから。」というように、物語文法という観点を持ちながら物語を観察できていた。

３．振り返り

「浦島太郎物語」、「移り行く浦島太郎物語」、「かぐや姫」の三つの文章を読み、その経験を使いながら俯瞰的に「竹取物語」を読むことができた。この取り組み自体が長い物語のようだったが、最後まで主体的に取り組めたのは、「教材の連続性」と、「前作業の活動」が効果的だったからではないかと考える。物語は語りである。生徒の中にも語る言葉や話がある。それを使うことは、取り組みやすさを生み、深い理解への支援にもなる。日本の昔話や歴史的仮名遣いの学習は動機が低くなりがちだが、工夫次第で情意的なエンゲージメントだけでなく認知的なエンゲージメントも高い状態を保つことができると考える。

注１）文部科学省（２０２５）「文化的言語的に多様な背景を持つ外国人児童生徒等のための 「ことばの発達と習得のものさし」（ことばの力のものさし）実践ガイド」